

関東大震災時の学生の救援活動

—東京帝国大学学生救護団を中心に—

鶴田 一郎

(広島国際大学 心理科学部 臨床心理学科)

【要旨】1995年(平成7年)1月17日に発生した「阪神淡路大震災」では、日本の各地から若者を中心として被災地区にボランティアが集まった。彼らの生き生きとした活動振りを見て、マスコミは「ボランティア元年」と呼んだ。しかし、日本の災害史上、最大の死者(10万人以上)を出した1923年(大正12年)9月1日に発生した関東大震災においても学生・生徒、青年団、在郷軍人会などが「ボランティア活動」に参加した記録がある。本研究では、災害カウンセリング研究の一つの区切りとして、関東大震災時の学生の救援活動を特に東京帝国大学学生救護団を中心に検討してみたい。なぜなら、ここに災害カウンセリングの原点があるからである。そこで、本稿では、まず東京帝国大学学生救護団の結成の契機を述べた上で、次に帝大学生救護団の具体的な活動を検討し、最後に帝大学生救護団がきっかけになって成立した東京帝国大学セツルメントについて考察し、まとめとする。

1. はじめに—問題の所在—

1995年(平成7年)1月17日に発生した「阪神淡路大震災」では、日本の各地から若者を中心として被災地区にボランティアが集まった。彼らの生き生きとした活動振りを見て、マスコミは「ボランティア元年」と呼んだ。しかし、日本の災害史上、最大の死者(10万人以上)を出した1923年(大正12年)9月1日に発生した関東大震災においても学生・生徒、青年団、在郷軍人会などが「ボランティア活動」に参加した記録がある(斉木1973、佐々木2002、鈴木2004)。

本研究では、災害カウンセリング研究の一つの区切りとして、関東大震災時の学生の救援活動を特に東京帝国大学学生救護団を中心に検討してみたい。なぜなら、ここに災害カウンセリングの原点があるからである。そこで、以下、まず東京帝国大学学生救護団(以下、「帝大学生救護団」と略)の結成の契機を述べた上で、次に帝大学生救護団の具体的な活動(給養事務・尋ね人・東京罹災者情報局)を検討し、最後に帝大学生救護団がきっかけになって成立した東京帝国大学セツルメントについて考察しまとめとする。

2. 東京帝国大学学生救護団について

関東大震災は東京・神奈川を中心として甚大な被害をもたらしたが、東京帝国大学があった東京市本郷区(現在の文京区の一部)も無論、例外ではなかった。東京帝国大学では地震直後、薬学教室・医学教室・応用化学教室など四ヶ所から出火し、更に校内全域に類焼し、医学部とその附属病院を除き、図書館をはじめ文科・法科・生理学の各教室のほか四十余棟が焼失した(太平洋戦争研究会2003, pp.54-57)。ここでは自らも被災した東京帝国大学の学生が学生救護団を結成し被災者の支援活動を行なった軌跡を描き、更に、それらの活動が、その後の東京帝国大学セツルメントの結成に、どう繋がっていったのかについての考察を試みたい。

(1) 帝大学生救護団の結成

帝大学生救護団結成の経緯については宮田(1995, pp.7-19)に詳しい。ここでは、この文献に沿った形で述べてみたい。

1923年(大正12年)7月1日、帝大学生38名は夏期休暇を利用し、軍艦「神威」に乗船し、かつてはドイツ領だったが、第一次世界大戦後、ベルサイユ条約により日本の委任統治領となっていた、南洋群島(マリアナ諸島・マーシャル諸島・カロリン諸島など)の視察に向け、出発した。この旅行の目的は、公的には現地の人々の民俗・生活を視察することで、メンバーは主として学内学生委員を中心として構成され、それ以外には文学部社会学科の学生たちであった。

視察のスケジュールは、横須賀軍港を出発し、ボルネオ島東岸のタラカン港に寄港、パラオに向かい、そこをベースキャンプとして、マーシャル諸島・カロリン諸島などを巡遊するものだった。そして約二ヶ月の視察の旅を終え、帰路に就くが、八丈島の沖合いに差し掛かった9月1日に無電で関東大震災が起こったことを知る。9月2日には横須賀軍港に到着するが、火災で接岸できず、他の艦に移り、芝浦で午後四時に下船した。

そのまま学生たちは急ぎ帝大に向ったが、約2000名の被災者が法学部その他の講堂に避難していた。直ちに、学生委員を中心に構成されていた視察メンバーの学生たちの多くは、校内に集まっていた学生と合流し、学内に泊り込み、被災者の援助に当たることになった。仕事は食べ物の配給・病人の世話などであった。その後、救援に当たる学生数は徐々に増えていった。

暫くして学生たちは、上野公園にいる1万人を越える被災者の状況を知り、9月12日に、まず30名の学生が上野の山に向った。この後、10月11日の分散式まで、帝大学生救護団上野支部として、次項から述べる「給養事務」「尋ね人」「東京罹災者情報局」などの活動を行なっていくのである。

なお、この項は上村(2001)も参照した。

(2) 帝大学生救護団の活動—給養事務—

この項では、末弘(1923)・宮田(1995, pp.12-14)を参照し、帝大学生救護団の活動の内、「給養事務」に焦点を当てて検討したい。

9月6日には法学部の末弘厳太郎教授が大学に現れた。末弘教授は既に学生たちが自発的に救援活動をしていることを喜び、これを「学生救護団」と名づけた。その二、三日後には法学部の穂積重遠教授も加わって指導に当たった。学生救護団の方法は、本郷区の了解を得た上で、大学のトラックで秋葉原・芝浦などに赴き、米その他の副産物を求め、運び入れる一方で、学内避難者を幾つかの自治団体に分け、食料・慰問品などを自主的に管理させた。その結果、配給品は公平に分配できるようになった。

大学構内の救護は極めて整然と行なわれ、そのことで模範的な避難所であるとの噂が立ち始めた9月20日頃、穂積教授の「上野の山には一萬の避難民がおるそうだ。それがまったく無秩序で、しかも排便で黄金の山と化し、不衛生きわまりないという。これもなんとかしようではないか」(宮田1995, p.13)という発言があった。それに呼応した学生たち約20名がトラックで上野に向うと、確かに酷い惨状であった。食糧の配給は区役所の炊き出しによって行なわれ、被災者たちは昼食を得るために、午前八時頃から列をつくらなければならなかった。排泄物は公園内の至る所に放置されており衛生状態は非常に劣悪であった。

これではいけないと痛感した学生たちは一旦帰り、翌朝、鋤・鍬・シャベルを持って再び集まった。そして竹の台の美術館前にテントを張り、まずシャベルで排泄物を掃除し、次いで藁藁座でトイレを各所につくった。それと同時に、上野署署長および警視庁・小栗衛生部長の厚意により防疫材料を入手し、学生自らが消毒作業を行った。また、配給を合理的にするために大学構内での方法と同じく、地域を14地区に分け、それぞれ青年団の責任者を置いて自治制をひいた。その結果、慰問品や救援物資は全て学生たちの手で平等に分配されることになって混乱は沈静化した。このようにして被災者の救援にありがちな救援物資を必要以上に配給してしまったり、逆に、ある地域が配給不足に陥ったりすることを防いだのである。

なお、この項は野田(1995, pp.69-73)・上村(2001)も参照した。

(3) 帝大学生救護団の活動—尋ね人—

この項では、末弘(1923)・宮田(1995, pp.14-15)を参照しながら、帝大学生救護団の活動の内、「尋ね人」に焦点を当てて検討したい。

給養事務と並行して「尋ね人」のシステム化および安否情報の提供が行われた。行き別れた人を探すための「尋ね人」の札が、罹災者によって至る所に貼り出されていたが、これに対して学生たちは

2000人の学内の避難者名簿を作成し、引き続き更に市内(都内)各地の避難所を調査した。

その時、東京市の市政調査会が同様の調査を開始していることが判明し、両者は交渉して分担調査を行い、その結果、全市にわたる避難者名簿が、十日ほどで作成され、東京日日新聞紙上に発表された。それと同時に学内に「尋ね人係」と称する窓口を置いて、毎日、多くの人々の問い合わせに応じた。

このような活動は、1995年に発生した阪神・淡路大震災ではマスメディアが担当したことだったが、既に1923年の段階で帝大学生救護団などが行っていたことに筆者は率直に驚いた。

なお、この項は上村(2001)も参照した。

(4) 帝大学生救護団の活動—東京罹災者情報局—

この項では、末弘(1923)・穂積(1924)・廣井(1987)・宮田(1995, pp.15-16)を参照しながら、帝大学生救護団の活動の内、「東京罹災者情報局」に焦点を当てて検討したい。

9月11日は穂積重遠教授を中心に事務の一切を学生たちに一任する形で「東京罹災者情報局」が設立された。これは末弘教授の帰郷時の体験から、東京在住者の情報を地方の関係者に提供する機関の必要性を感じたことに始まる。この事業は各地の避難所で収容者の、また区役所・警察署などで死亡者の住所・氏名を収集して、問い合わせに応じるというものだった。

すぐに政府の臨時震災事務局の承認を得て「東京罹災者情報局」が設立され、高等学校・専門学校などの学生の応援もあって、情報原簿三十巻が作られることとなったが、この情報局の存在は9月12日の段階で臨時震災救援事務局により、全国各地の新聞紙上で告知された。そして9月19日までに15000件の問い合わせがあったのである。

廣井(1987, pp.67-69)がまとめるところによれば、東京罹災者情報局の仕事は次の五つである。

- ① 火災にあった場所と免れた場所との境界を明らかにすること。
- ② 焼けない場所の潰れ家調査。
- ③ 死傷者の調査。
- ④ 迷子の調査。
- ⑤ 避難者の立ち退き先調査(当座の避難所・半永久的な落ち着き場所)。

東京罹災者情報局の事業の中で学問的に高い評価を得たのが、焼失区域図の作成であった。これは関東大震災時の東京における火災の発生地点・延焼地域・風向・死者数などを克明に表記したもので、後の都市計画・防災計画の立案に大きく役立つものだった。

作成に当たっては、医学部学生の林暉と工学部学生の林良材が中心となって進め、一万分の一の地図を持って、二人で手分けして焼跡を歩き、罹災者が住む仮設住宅を一つ一つ訪ね、何時ごろ家が焼けたのかを聞き、そこから火元を推測し、更に气象台に9月1日から3日までの風向き・風速

の変化を尋ねて、資料を整理した。その整理されたものに、死体の集積地と、その数を記入していた。

その結果、九十数箇所の火元があったことが判明し、貴重な資料として、東京日日新聞が買い上げ、東京日日新聞社・大阪毎日新聞社によって『帝都大震火災系統図』（復刻：東京帝国大学罹災者情報局 2008）として出版された。

(5) 東京帝国大学学生救護団から東京帝国大学セツルメントへ

この項では、宮田(1995)・上村(2001)などを参照しながら、帝大学生救護団の活動が如何に後の東京帝国大学セツルメント(以下「東大セツルメント」と略)の活動に繋がっていったのかについて検討する。

様々な活動を行った帝大学生救護団も 10 月 10 日をもって活動が一段落したとして、11 日には分散会を開き解散した。分散会で帝大学生救護団を振り返り、穂積教授は「人間らしさの発揮」を、末弘教授は「第一義的な生活の大切さ」を強調しているが、学生たちの中には、そのこと自体すでに不純だと感じた者がいた。

そのあたりを総括して、上村(2001)では、帝大学生救護団の活動により学生たちは「困難な状況にある人々に対し見返りを求めることなく、人間として援助していくことの大切さと喜びを感じたと言えるだろう。また、多くの救護団体の恣意的な活動に接し、組織的・計画的・専門的な援助の必要性とともに、被災者による自治的組織の重要性を認識したのではないだろうか。そのためにも、大学の教員・学生がその知識を文章や講演という方法で人々に説いていくという吉野作造(法学部教授)に代表される『大学普及』よりも、人々と直接接することにより、その知識を分かち与えることの大切さを体得したと考えられよう」(p.35)と述べている。

上の文章にある「大学普及運動」とは、大学の学者が大学の外に出て、一般向けの講演や寄稿によって社会改革を訴えるという活動であった。これは 19 世紀イギリスで始まった“university extension”を訳した言葉だが、これには「大学拡張運動」という訳語を当てる人々もいた。「大学拡張運動」は「大学普及運動」と、その指し示す意味において、共通する部分もあるが、若干異なっているところもある。「大学拡張運動」とは、大学の課程(授業)を大学以外の場所で労働者のために提供するという活動である。

そのためには大学外に貧民学校を設立しようという動きになるのだが、その前に貧民労働者の実際生活を自らが体験し、その上で高等教育・救済計画を進めるべきだろうという考えになる。つまり、まずは労働者のいる貧民地区に「定住すること」(セツルメント：settlement)が強調されるようになった。これがセツルメント運動の始まりである。

このセツルメント運動に帝大学生救護団が向かった経緯については、宮田(1995, pp.16-18)に詳しいので以下、要約した形で紹介する。

先述したように、帝大学生救護団の活動が一段落した 10 月中旬、救護団のリーダーであった内村^{うちむら}

治志が東京罹災者情報局に当てられていた詰所にいると、末弘教授が、社会運動家の賀川豊彦氏から「上野での救援活動を継続してくれないか」という相談を受けたことを話してきた。それに対して内村は「学内外の活動で疲労したのと、自分たちの仕事はもう終わったということで、これからは行政に任せるべきだ」と答えた。

この後、三日ぐらいして再び同じ相談を末弘教授から受けた内村は、自身、文学部社会学科の学生でもあり、学問の実践を兼ねて活動を続けても良いと思い直した。そして「この冬だけではなく、いつそのこと永久的な学生の運動、例えばオックスフォード大学のセツルメント活動のようなものにしたらどうか」と提案、学生救護団のメンバーも全員賛成し、ここに東大セツルメント結成の端緒を得たのである。

このように帝大学生救護団は東大セツルメントに引き継がれていったのだが、そう容易に移行されたのではない。しかし、東大セツルメントの源流が帝大学生救護団にあることには疑問の余地はなく、何としても、末弘教授自身が、それを強く望んでいたことが指摘されている(上村 2001, pp.35-36)。末弘教授の思いとは、大上段に構えて救済してやる・教育を施すといった姿勢ではなく、学者・学生自らが地域に入って行き、住民との「友人としての交流を通して相互に教え・学びあい、与え・与えられながら、地域住民とともに成長し、地域の改良を目指す」(上村 2001, p.36)ということであった。このような姿勢があったがために、帝大学生救護団から東大セツルメントへ、と困難なことは多々ありながらも移行し、現在も、その精神が継続されているのである。

因みに、東大セツルメントの活動として当初より始められたのは、まず第一に、労働者の 1.「成人教育」であった。それに加えて、帝大社会学科学生が継続してきた 2.「社会調査」であり、この二つを柱として、それに四つの事業部(3.「児童部」・4.「医療部」・5.「相談部」・6.「市民図書部」)が加わり、全部で六つの事業が行われるようになった。

1の「成人教育」はセツルメント運動本来の活動であるし、2の「社会調査」は帝大学生救護団で培われたものの継続である。3の「児童部」は、まだまだ就学率が低い状況を見て作られたものであろう。4の「医療部」は医療活動そのものが社会運動に大きな位置を占めていた証である。5の「相談部」はカウンセリング活動の萌芽であろう。そして6の「市民図書部」は、図書が一部の知識階級の占有物として存在するのではなく、広く一般市民も利用可能にしようとする試みと思われる。

3. おわりに—まとめにかえて—

本研究では、災害カウンセリング研究の一つの区切りとして、関東大震災時の学生の救援活動を特に東京帝国大学学生救護団を中心に検討してきた。以上、まず東京帝国大学学生救護団(以下、「帝大学生救護団」と略)の結成の契機を述べた上で、次に帝大学生救護団の具体的な活動(給養事務・尋ね人・東京罹災者情報局)を検討し、最後に帝大学生救護団がきっかけになって成立した東京帝国大学セツルメントについて考察した。

その結果考えられるのは、東大セツルメント活動、そして、その源流としての帝大学生救護団の活動と理念が、現在に至るまで脈々と、その精神が引き継がれているということである。但し、批

判は多々あるだろう。その最も多くは、現在の大衆化された学生たちと、当時の社会の牽引者たる自負を持って活動していたエリート帝大学生との違いを指摘したものである。

しかし、これには大きな反論がある。1995年の阪神・淡路大震災の時は全て大学は大衆化されていたが、数限りない若者・学生が被災地に向かった。そして、かつては助けられる側であった神戸で被災した当時の乳幼児・少年少女が成長され若者・学生となり、2011年3月11日に発生した東日本大震災のボランティアに赴く姿を見た筆者は、そこに若者・学生の普遍的なあり方を、もっと言えば人間の普遍的なあり方、「精神のリレー」(作家・^{はにや ぬたか}埴谷雄高の言葉)を見出せると考えている。これが「災害カウンセリング研究」と題して行ってきた一連の研究の暫定的な結論である。無論、災害カウンセリングに関する実践の裏づけがなくては不十分であるし、言うまでもなく災害カウンセリングに関する「最も困難なことは今始まったばかりなのである」(チェーホフ『犬を連れて奥さん』より)。

文 献

廣井脩(1987)「東京罹災者情報局」廣井脩『災害報道と社会心理』中央経済社、pp.62-73。

穂積重遠(1924)「東京罹災者情報局の活動」山本美(編)『大正大震災火災誌』改造社、pp.87-98。

宮田親平(1995)『だれが風を見たでしょう——ボランティアの原点・東大セツルメント物語』文芸春秋。

野田正彰(1995)『災害救援』岩波書店。

齊木勉(編)(1973)『私は激震の中にいた——旧制第一高等学校学生被災体験記集』友朋社。

佐々木啓子(2002)「関東大震災と女子高等教育機関の復興活動——女子大学アーカイブズより」『UP : University Press』(東京大学出版会)31(6)、pp.23-30。

末弘巖太郎(1923)「帝大學生救護團の活動に就いて」『改造』(1923年10月号・大震災号)、pp.74-81。

鈴木淳(2004)『関東大震災——消防・医療・ボランティアから検証する』筑摩書房。

太平洋戦争研究会(編)(2003)『図説 関東大震災』河出書房新社。

東京帝国大学罹災者情報局(2008)『帝都大震災火災系統図』(CD-ROM版)京極堂。

上村康子(2001)「大災害が社会福祉に及ぼす影響について——関東大震災における学生救護団を中心に」『天理大学社会福祉学研究室紀要』(天理大学人間学部人間関係学科社会福祉学専攻研究室)3、pp.31-40。

付 記:筆者の恩師である伊藤隆二先生(横浜国立大学名誉教授)から本稿の最後に書いた作家・埴谷雄高の言葉である「精神のリレー」に関連して、「精神のリレーについては『ユートピア現象』(utopia-phenomenon)に詳しい」というご指摘をいただきました。付記して謝意を表する次第です。ユートピア現象とは「社会心理学の用語で、共通の重大な危機に直面したとき、人々は法則や利害によらずに、同じ境遇に置かれているという認識(というよりも集団本能)で、助け合おうという心理が人々の間に働き、広がる現象をいう。たとえば、大地震に見舞われた場合、助かった人もまたボランティアとして駆けつけた人も、自然に、けがをしている人や救いを求めている人に愛の手を差しのべるようになるのがそれである。ただし、幼少時から絶えず他から意図をもって働きかけられ、指示待ちの姿勢をとることが習慣化してしまっている人の場合、急場の際、困っている人を助けようとするかは疑問だ、と説く人も

いる。幼少時からのボランティア活動こそが、ユートピア現象の最も強力な誘発因になることは間違いない」〔伊藤隆二(1999)「ユートピア現象」恩田彰・伊藤隆二(編)『臨床心理学辞典』八千代出版、p.507。〕と解説されています。なお、ユートピア現象に関する文献には米国のノンフィクション作家であるレベッカ・ソルニットによる『災害ユートピア：なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか(原題：A paradise built in hell：the extraordinary communities that arise in disaster)』(高月園子訳・2010)亜紀書房があります。ご一読をお勧めしたい書籍です。